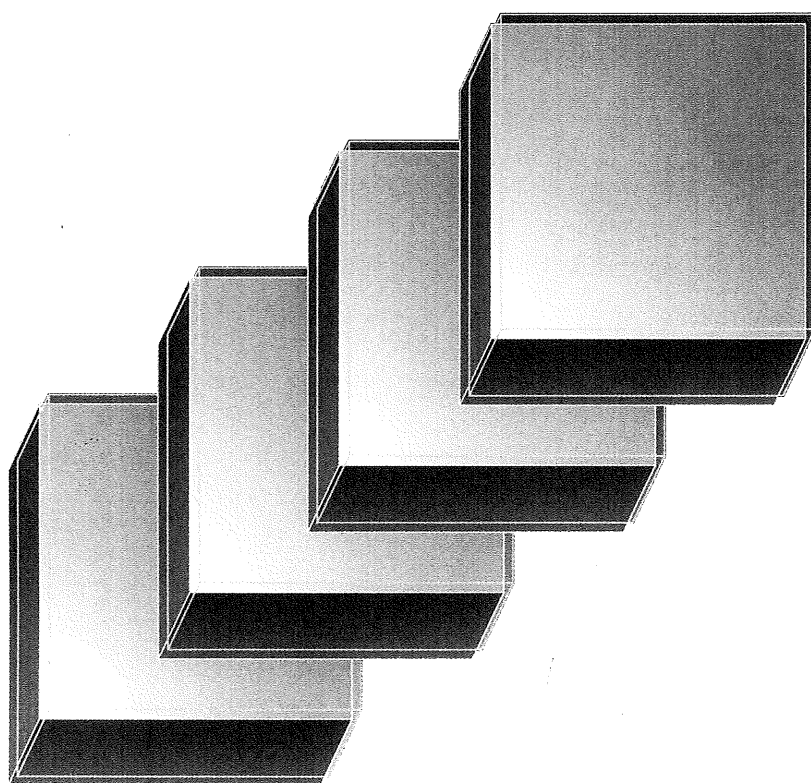


Japan Academy of Community Health Nursing

日本地域看護学会 第18回学術集会 講演集



会期 2015. 8. 1(土)～2(日)

会場 パシフィコ横浜

会長 田高 悦子

(横浜市立大学大学院医学研究科地域看護学分野教授)

ワークショップ I

科学としての地域看護学 ～質的研究について考える～

高木 廣文 (東邦大学看護学部国際保健看護学研究室教授)

座 長

尾崎 章子 (東北大学大学院医学研究科老年・在宅看護学分野教授)

【趣旨】

質的研究法は、看護学の研究方法の一分野として確立しつつある一方で、科学性や一般化可能性に関する疑問などが提出されている。本ワークショップでは、主観的なテキスト解釈に基づく手法や、質的研究が導き出した一見当たり前の結果がもつ意味について、科学としての質的研究の哲学的基盤から考える。

【抄録】

看護学というと多くの人は「臨床」での看護実践を思い浮かべるのではないだろうか。地域看護学は、地域集団をその対象としているので、看護学を臨床のみに考えていると議論が上手くかみ合わない。このように対象分野で分類すると、看護学も「個人」と「集団」に大きく区分できる。同様に、人間を対象とする研究は、その研究形態により量的研究と質的研究に二分される。

いわゆる量的研究の科学性自体を問題にすることはしないのだが、質的研究が科学かは、よく俎上に上る。質的研究の科学性を議論する前に、質的研究とは本質的にどのような研究なのかをまず考えておく必要があるし、さらに「科学とは何か」を明確にしておかなければ議論にならない。

世の中に生起する様々な現象について考えてみると、客観的な自然事象(モノ)を研究対象とするのが「量的研究」であり、主観的な心的存在の中に生起する現象(コト)を扱うのが「質的研究」であると、私は大きく区分している。量的研究は、様々な現象のある側面を「測る」ことによりデータを収集するために、客観的で再現性も高いものと考えられる。一方、人間の心的で主観的な内部世界の現象に関しては、当人の言葉で語られる必要がある。このため得られる情報は決して個人的であると考えられがちである。しかし、質的研究は本来に対象者からの言語による情報がなければ、研究を行うことはできない。

それでは科学的な研究とは、どのような研究なのだろうか。多くの人たちは、科学とは真理を明らかにしたり、ある現象の因果関係を明らかにすることを目的とするような営為だと思っている。しかし、このような考えは、科学の本質を言い当てているとは思えない。科学哲学の考え方であるポPPERの反証主義やクーンのパラダイム論などは科学理論を考える上で有用である。しかし、量的研究のみならず質的研究の科学性を担保するためには、どちらにもあてはまる科学哲学が必要である。この点から、私は構造主義科学論の立場をとっている。構造主義科学論では、『科学とは同一性(構造や形式)の追求であり、科学理論(モデル)の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる』という立場をとる。このように科学というものを捉えると、ある現象を説明するために構造、理論、モデル、システムなどを仮定して行う研究は、量的か質的かを問わず科学的な研究と考えることができる。仮定されたモデルで現象説明が上手くいかなければ、他のよりよい理論に修正・変更される。科学の総体は、そのような理論の提案、修正、新理論の構築といった螺旋的軌跡から構成されていると考えられるだろう。